



「演劇」を活用した英語教育 — 演劇ノススメ —

国際学部 塩 沢 泰 子



千葉県・山形県の中学・高校での7年間の英語教員を経て大学に勤務。パブリック・スピーキングやディベートなどオーラル・コミュニケーション活動の指導が専門。2004年に文教大学国際学部へ赴任してからは演劇的な手法を英語教育に活用することに特に力を入れている。演劇による市民教育、社会変革を標榜するフィリピンの教育演劇センターでの修行から大いに影響を受ける。NHKラジオ高校講座英語Ⅱの講師を2004年より務める。
(しおざわやすこ)

「演劇」というと特別な訓練を受けた人々による芸術的なもので、一般人は「鑑賞」するもの、とみなされがちであるが、ここでは筆者が担当する「英語とメディア」、「異文化理解演習」、「専門ゼミナール」という演劇を取り入れた授業の一端を紹介する。拙稿が、演劇ならびに演劇的な諸活動の教育への活用に目を向けるきっかけになれば幸いである。

1. 「英語とメディア」での交渉劇 — 時事問題を身近にするインフォーマルなディベート

本授業は、時事問題を読解・分析した上で、意見を発信することを目的とし、ディベートを中心的な活動に据えている。また、ディベート実施前後に、ペアもしくは小グループで関連した話題について交渉劇を行い、話題への関心を高めたり、争点をより深く考察させている。

扱うトピックはメディアを賑わす最新のものから、死刑制度や安楽死など長年論争されるものまで多岐にわたる。2012年度の授業では尖閣問題や原発問題から美容整形などを扱った。ディベートの形式は、本授業では立論・反論・防御・結論の4つのセッションで構成され、40分ほどで1試合できる方式を主に使う。事前準備を重視し、ブレインストーミングや下調べを

し、フローシートに自分の側のみならず、相手側の論点や反論の予測を記入してディベートに臨ませる。

さて、今回主眼の「演劇的活動」であるが、フォーマルなディベートの前後に、ペアになってその日のトピックに関連した対立する2者を設定して説得しあうのである。たとえば、代理出産がトピックの場合、「子どもが欲しいのに恵まれない夫婦」を想定し、一方は養子の検討を主張し、他方は生殖技術への依存を主張する。その際、ペアではなく、それぞれ援護射撃をする友人や親戚を加えて2対2にしてもよい。おもしろいことに、ディベートでは代理母賛成派は劣勢であったのに、交渉劇となると学生の目が輝き、「血のつながりは大事」という主張があちこちから聞こえてきたりする。このような活動により、問題の本質や本音が見えてくる。

2. 「異文化理解演習」での役割練習 ——相手の身になって考える訓練

本授業は国際学部で2001年度から実施している3ヶ月の短期留学（2年次春に実施）参加者を対象とした事前準備を目的としている。短期留学先は米国、豪州に次いで2012年からはタイも加わり、国際学部では毎年60名以上が参加する。本授業では国際情勢、現地社会、日本との関わりの学習を中心に、英語でのプレゼンも多い。

留学に伴う危機管理も重要で、起こりうるトラブルのシミュレーションを英語で行っている。たとえば、ホームステイ先で夜シャワーを浴びたいのにさっさと寝てしまうホストファミリーに対し、どう交渉するかとか、友達を連れてきて毎晩遅くまでしゃべって迷惑なルームメイトとどうつきあうか、といった短期留学参加者が実際に経験したトラブルをもとに文教官と現地の人、という設定でロールプレイをするのである。トラブルは軽度のものから、命の危険にもつながる深刻なものまである。この訓練によって相手の身になって考え、異なる価値観を理解でき、関連表現も身につくと期待される。

3. 「専門ゼミナール」での演劇活動

筆者の専門ゼミ生全員は3年次に全員で30分程度の英語劇に取り組み、大学祭と学外での発表会で披露する。その第一の目的は、大学での学びを共有して客観化し、成果を再認識することである。言い換えれば、学生たちが人々に訴えたい主張を、体験や調査をもとに、創造性と芸術的手法を交えて演劇にするのである。

これまで扱った作品はカルチャーショックを題材としたものや、「もったいない」精神を啓蒙するもの、ビジネスマナー講座などゼミ生がゼロから創作したものから、既存の台本を翻訳、脚色したものなど侃々諤々の議論を経て生み出してきた。2012年度の4年生は3年次の発表の充実感が忘れられず、卒業制作として全員が一丸となってシェイクスピアの悲劇に挑戦した。その表現力の深さと人間的な成長振りには我が学生ながら目を瞠るものがあった。実際、テーマの決定から取材（インタビュー、体験、観察、文献検索）、手法の決定、台本作成、脚色、そ

して芸術的な効果を駆使して発表に至るプロセスはまさしく全人的な総合学習活動であり、学術的研究ならびにその発表と同等と言えよう。



専門ゼミのミュージカル練習風景

4. まとめ

演劇は、言語教育だけでなく、様々な観点からその有効性が指摘できる。まず、言語教育の観点からは、意味深い場面で自然な会話表現を扱うこと、繰り返し練習し、演じることにより表現を内在化すること、そして体と精神、言語を関連付ける点で効果がある。

アカデミックな観点からは、学生の専門や関心などにより、様々なテーマを扱うこと、説得力ある作品を創るためにリサーチやインタビューなどが促されること、そして学生の観察に加え、自分自身の「修行」体験から実感したのだが、演じることによってテーマについて問題の核心に気づいたり、より深く考えるようになる。

次に全人的教育の観点からは自己表現力を高めること、五感、特に観察力、共感力、洞察力を育むこと、グループ・コミュニケーション力、協調性を高めることが演劇の特徴である。動き、衣装、音楽などを吟味し、統合することにより、芸術へと昇華できることも重要な点である。さらには、演劇が双方向的で視覚的であることから、様々な学習スタイルを持つ学生が活躍する場面が必ずあり、互いを認め合い、ポジティブに依存しあう「協同学習」の要素を備えていることも特筆すべきであろう。

これだけ可能性を秘めた演劇は言語教育だけでなく、問題発見や解決を探るような他の分野でも活用しない手はない。筆者の場合、演劇活動はおもしろいのでやめられないというのが偽らざるところではあるが・・・。